

Title	「生きる力」とからだの発達：幼児保育の在り方を考える
Author(s)	梅津, 迪子
Citation	聖学院大学論叢, 11(4): 239-249
URL	
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「生きる力」とからだの発達

—幼児保育の在り方を考える—

梅 津 迪 子

Life Skills and Physical Development in Infant Education

Michiko UMETSU

In light of the fact that we are entering a new century, the author investigated the following problems related to infant education.

- 1) Infant physical abnormalities caused by environmental factors
- 2) Movement and awareness on the part of infants
- 3) Support systems for infant education

The essential findings of the investigation are as follows: Many nursery teachers have problems planning and implementing play activities for infants. They know little about the methods and content of play. In order to nurture life skills, it is important to appreciate the importance of play.

Both teachers in the nursery schools and researchers must collaborate to solve problems. Furthermore, it is necessary to improve not only in-service training, but also pre-service training, i.e. student teacher training.

1. 緒 言

今から遡ること20年以上前に、教育課程審議会は「教育課程の基準の改善に関する基本方針について」(中間まとめ, 1975)のなかで、「国民に必要とされる基礎的・基本的事項を重視する」ことを掲げている⁽¹⁾。そのころの社会状況を思い起こすと、産業構造がシフトチェンジし、情報産業が強化されるとともに、国際競争力増強のために経済価値優先の労働環境が定着していった。一方、子どもの家庭内暴力や殺人事件が頻発し、刑法犯罪による少年の補導人数はピークを迎えたのもちようどこの頃であった⁽²⁾。家族の育児観、教育観、価値観とそれに基づく態度、行為に心理的・社

Key words; Ability for Life, Infant Education, Physical Development

会的環境が大きく影響していることが改めて話題に取り上げられた。さらには、「子どものからだは蝕まれている」と指摘されたように、小学校教育の現場において子どものからだの「おかしさ」が顕著となり（正木，1978），身体的側面でも歪みが発生しはじめた⁽³⁾。

このように、早期に子どもの心とからだの危機が叫ばれながら、80年代半ばでは、子どもの問題行動が漸増傾向とともに深刻化していった。東京都立教育研究所⁽⁴⁾の報告によれば、現代の子どもの特徴として、自主性・自律性に乏しい、自己主張や行動力はあるが粘り強さや持続性に欠ける、情緒不安定で対人関係は不適応状態である、無気力・無感動、自己中心で連帯性に欠けるなどの点が指摘されている。そして、子どもの問題行動は、子どもが家庭・学校・社会における生活で、自己抑制をしたり、葛藤に陥ったり、逃避したりして自然な成長、発達が妨げられたことに起因するという。つまり、それは心の歪みの表現であると同時に子どもの側からのサインと解釈できる。このことから、子どものこころとからだは自然成長（発育・発達）をしていないことに、親・教育者・地域社会・環境等が少なからず関係していることが見て取れる。

翻って1998年、中央教育課程審議会⁽⁵⁾は、学校週5日制への移行にともなう学習内容の厳選と基礎・基本の徹底により「ゆとりのなかで生きる力をはぐくむ」ことを答申の基本方針として打ち出した。その根底には、我が国の文化や伝統、誠実さや勤勉さ「和の精神」、自然を畏敬する心、宗教的情操などを誇りとしながら、新しい時代を積極的に切り拓いていく人材の育成が意図されている。それは、子どもの心を育てるべき大人社会が「次世代を育てる心を失う危機」に直面しているとの認識に基づくものであると言われる。つまり、大人社会の在り方にこそ問題があり、その解決策を早急に見出すことが求められているといえよう。とりわけ、答申では、すべての教育の出発点となる家庭の在り方を問い直し、善悪の判断を教え、家庭生活に子どもを参加させ、遊びを重視し、子どもの個性を大切にす、などの項目があげられている。しかしながら、それは、地域社会と学校が連携・協力して推進するよう提案されるにとどまり、望ましい家庭教育の在り方を誰が、どのような方法で浸透させていくのか具体的に提示されていない。

また、先の答申では、自ら学び、自ら考え、（興味・関心・意欲・態度）、自分の言葉で表現し、論理的に判断し、問題を発見・解決することができる能力として「生きる力」をはぐくむことが重視されているのであるが、これは、現代の子どもをめぐるこころの問題が広範囲化・深刻化していることと表裏一体をなしている。今後、社会全体のモラルの低下、過保護・過干渉といった家庭の教育力の低下と外注化、地域社会における人間関係の希薄化による規範意識の低下などにより、忍耐力やたくましさの欠け、自己中心的で責任感が乏しい子どもが増えていくことがますます懸念される。

こうして見渡すと、子どもを取り巻く状況は好転していないどころか、問題そのものが多岐にわたり、複雑化・深刻化している。すでに、70年代頃から蓄積しつつあった子どもの心身の問題は、原因の究明や対策が緩やかであったことや社会情勢の激変に人々の意識が対応しきれなかった

「生きる力」とからだの発達

ために、有効な解決策が講ぜられることなく今日に至っているのである。

さらに21世紀は、人口減少社会の到来となり、超高齢社会・少子化社会といったわれわれがかつて体験したことのない社会となることが確実である。加えて、女性の就業率の増加と就業形態の多様化にともない、低年齢の保育需要の増加と保育の在り方をめぐる問題がいよいよクローズアップされている。

すでに述べてきたように、現代の子どもの心やからだの問題現象は発育・発達の過程で徐々に現われるものである。今日、ほとんどの子どもにとってはじめての社会は、幼稚園や保育園で開始される。そして、その時期は「生きる力」の基礎を培うスタート地点でもある。このように重要なステージである保育現場では、社会環境の変化や社会のニーズを視野に入れながら、子どもの視点に立って保育を支援することが望まれる。

そこで、本研究では、上述してきた社会状況を踏まえつつ、子どもをとりまく現象を発育・発達の視点から見つめ、とりあげ、「生きる力」をはぐくむための方策について考察を加える。特に、「生きる力」の基礎となる幼児期の「運動遊び」に焦点を当て、保育者や幼稚園教諭がどのような関わり方をすればよいのか、ひいては、幼稚園教諭・保育士養成校においてどのような資質を育てていけばよいのかを探究する。

2. 子どもをとりまく現状とからだの変化

子どもの「からだのおかしさ」や「背筋力の低下」が叫ばれてから20数年が経過した。その時代に子どもであった世代は、立場が逆転し親として子育てをする年代になっている。その間、からだに起きている問題現象は、社会状況の変化とともに変容し深刻化しているように思える。子どもは、遊びのなかでからだの諸機能を発達させ、感性を養い、仲間と関わることで協調性や自己制御、相手への思いやり、遊びを工夫・発展させていく能力や創造性などを学んでいくといわれている。遊びが成立する要素は「空間」「仲間」「時間」「方法」などであるが、その条件は年々悪化する一方で、遊びを体験する機会も減少の傾向にある。今日、親を中心としたライフスタイルは、当然、子どもの心身になんらかの影響を及ぼしていることが考えられる。

例えば、1990年の「幼児健康調査」⁽⁶⁾によると、就寝時間が11時過ぎの3歳以下の子どもの割合が、4歳以上の子どもより高い傾向であるとしている。さらに、1歳児の10時以降の就寝も3割以上である。つまり、いずれの年齢でも、8時台の就寝が減少し、10時以降が増加しているのである。当然、就寝が遅くなった分、起床時間も遅くなり、全体の約7割が8時過ぎであるという。

また、別の調査によると、乳幼児の就寝時間ばかりでなく、昼寝の時間や食事の時間、食事内容もバラつきがかなりあり、戸外遊びは極端に少ない。この状態は、子どもの生活リズムが不規則になりやすく、十分な睡眠の保証ができないばかりでなく、日中、思いきりからだを動かして遊ぶ意

「生きる力」とからだの発達

欲や、活動ができない状況を生みだしているといえよう。

さらに、1995年度文部省の「学校保健統計報告書」によると、子どもの疾病・異常の被患率の割合をみると、小学校6年生で最も高いのは「虫歯」で84.93%、次は「裸眼視力1.0以下」の者が35.0%、次は「歯並びや歯ぐきの問題」が13.9%で「口のなか」や「歯」の問題がきわめて顕著である。

そして、大阪保健医協会では幼稚園、小学校、中学校で胸郭調査をしたところ、12.4%の子どもが正常でない胸郭をしていることが分かった。この数値は、前項の「学校保健統計」からみると20倍に相当する。そうした結果を案じて、大阪S市では1991年から5年間、小・中学校の児童生徒1万人の健康診断の結果を分析した。以前からいわれていたような、「病気ではないが、からだが『おかしい』」実態を認め、それらの症状を「学齢期シンドローム」と呼んでいる。また、日常診療のなかで85.6%の医師が「おかしい子どもがいる」と回答しているという。

以上のように、1970年代に保育や教育の現場で「おかしい」と指摘されはじめた身体的・精神的症状が、今日では「医療」現場においても実感されるようになってきたのである。それは、具体的には下記のような症状である⁽⁷⁾。

- ア. 皮膚疾患（大部分はアトピー性皮膚炎、ぜんそく）
- イ. 肥満の増加傾向（中学校では5%から10%に）
- ウ. 尿検査でタンパク、糖、潜血が一定数必ずあること
- エ. 脊柱側弯症（1990年から女子に増加）
- オ. アレルギー性鼻炎、扁桃肥大、蓄膿症
- カ. 虫歯、不正咬合、歯周炎
- キ. 視力の低下、近視、視力左右不同
- ク. 慢性疾患（小児成人病、糖尿病）

このような症状がみられることを正木はずでに指摘していたが、これは、「からだの不調」と「からだの発育不全」であるという。乳幼児期から学童期にかけての生活リズムの乱れは、自然に育つはずの体の諸機能（自律神経系）が自然に育たなくなることでもある。

3歳までに、たっぷりと汗をかかなかった子は汗腺が「能動汗腺」に発達できず、熱の放失が下手な子になり、体温調節機能の発育不全になりやすい。

一方、太田⁽⁸⁾は数年間、都内の保育園・幼稚園児約千名について、視力や立体視機能の発達の調査をしている。その結果、保育園児は幼稚園児より視力・立体視ともやや発達が早い傾向にあり、午後の過ごし方が目の発達にも影響を及ぼしているとしている。また、体育活動をしている園と普通の公立幼稚園の5～6歳の園児、活発な幼稚園児とそうでない幼稚園児についても同じ調査を実施している。体育活動をしている幼稚園の方が立体視で数%、視力で15%を上回り、同じように、活発な子どものほうが視力・立体視とも10%以上高い値を示したことを報じ、身体活動を積極的に

行うことが視機能の発達を促進させるとしている。

運動心理学者のシンガー⁽⁹⁾は「幼児期における運動経験が、その後の成長過程における運動機能や運動技能の発達に及ぼす影響が少なくない」と述べている。

3. からだの発達（運動機能と感覚機能）

1) 乳児期

表1⁽¹⁰⁾に示すように、新生児における移動を伴わない腕と脚の動きは、反射能力を完成させると同時に、次のステップの腹ばいの動きの不可欠な条件となる。また、その動きをどれだけ早く覚えるかが筋肉組織の発達につながり、脳の感覚系や運動系の発達にも影響を及ぼすのである。

腹ばいができる頃には手の機能も握ったものを離す能力を身につけている。把握運動の発達は、まず、肩とひじの関節におおざっぱな動きが現われ、その後、手関節や指の細かい動きが出現する。ジェーン・ハリーによれば、それは、目と手の協調ができていることでもあり、子どもの腕や脚を動かす働きかけ（筋運動刺激）は、生後6ヶ月までが最も効果が高いといわれる。

9ヶ月を過ぎると親指と人差し指でハサミのように何でも掴む姿がみられるようになる。これは、触覚運動性と視覚性の神経結合が成立していることである。指を使う動作は、脳の運動中枢と指の骨格筋との協応作用で行われ、指の微細制御のための運動プログラム機構は、ほぼ6歳までに確立するといわれている。

発達には順序性があり、直立や歩行までの動きの段階は、腹ばい→はいはい・お座り→高這いという移動運動になる。この一連の動きは、視覚に強く依存している。腹ばいをすることによって、大腿骨は股関節のくぼみを横から削るような形で動き、高這いをするようになると大腿骨の頭は股関節のくぼみを縦の方向にけずるように動くことになる。こうして、縦と横の両方からの力をうけて股関節が全体的に形成され、さまざまな方向に脚が動くことになるのである。したがって、この時期にははいはいや高這いのチャンスを少ししか与えず、赤ちゃんを歩行器や椅子に坐らせたままにしておいたりすると、股関節の発達や視覚に少なからず影響があるだろう。

高這いができるようになると、手の届くものに掴まって立ち上がろうとする。足に力を入れ、直立姿勢となるが、立ち始めた子どもは、神経筋反応の持続時間が長く、テーブルの端から端までつたい歩きするようになる。

次に手を離しても少しの間なら転ばないで立っていられる。数歩であれば転ばないで歩けるが、この段階は、腕を肩の高さ、あるいはそれより上げてバランスをとる。次に階段をよじ登りおりする。自分の体重は両腕で支え、脚は後ろから引き寄せたり膝を使う。

こうして子どもは、転んだり立ったり、坐ったりを繰り返しながらおよそ1年半までには、自分の意思で「ひとり歩き」を完成させる⁽¹¹⁾。

「生きる力」とからだの発達

表1

脳の発達段階		時間幅	視覚	聴覚	触覚	運動	言語	手を使う
Ⅶ	成熟皮質	優良 36ヵ月 72ヵ月 可 144ヵ月	完全に理解して読む	完全な語彙と正しい文を理解する	物に触れ識別する	優勢半球と対応する側の脚を、器用に動かす	完全な語彙と適切な文構造を身につける	優勢半球に対応する側の手を使って書く
			成熟した理解	成熟した理解	成熟した理解	成熟した表現	成熟した表現	成熟した表現
Ⅵ	初期皮質	優良 18ヵ月 36ヵ月 可 72ヵ月	すでに知っている文字や記号を認識	2000語と簡単な文を理解	触れることによりそれがどんな形状か決定できる	完全な交差パターンで歩き、走る	2000語の言葉と、短い文を話せる	両手が使える。片方の手がより優勢である
			初期理解	初期理解	初期理解	初期表現	初期表現	初期表現
Ⅴ	原始皮質	優良 9ヵ月 18ヵ月 可 36ヵ月	似てはいるが同じではない簡単な記号を識別する	10-25語の言葉と、2語からなる熟語を理解する	似てはいるが同じではない物に触れ識別する	平衡を保つための支えとして、腕を使わずに歩く	10-25語の言葉と、2語からなる熟語を話せる	両手で同時に皮質協応ができる
			原始理解	原始理解	原始理解	原始表現	原始表現	原始表現
Ⅳ	発生期皮質	優良 6ヵ月 12ヵ月 可 24ヵ月	視覚の収束による簡単な深さを認識する	言葉を2語理解する	平面に見える立体に手で触れ、その深さ奥行きを理解	腕を主要な支えに歩く。手は肩の高さかそれより上	2語ぐらいの言葉を正確な意味で自動的に使える	どちらか片方の手で皮質協応ができる
			発生期理解	発生期理解	発生期理解	発生期表現	発生期表現	発生期表現
Ⅲ	中脳	優良 3.5ヵ月 7ヵ月 可 14ヵ月	ある輪郭内の細部を識別する	意味を伴う音声を識別する	知的感覚を識別する	手とひざで這い、最終的には交差パターンになる	意味のある音声を出す	物を手につかむ
			意味づけ	意味づけ	意味づけ	意味のある反応	意味のある反応	意味のある反応
Ⅱ	脳橋	優良 1ヵ月 2.5ヵ月 可 5ヵ月	輪郭を認識する	恐しい音に対して生命保存のための反応を示す	生命保存上必要な触覚を認識する	うつ伏せで腹ばい、最終的には交差パターンになる	生命の危険に反応、生命維持のための泣き声をあげる	生命の危険に反応してにぎりしめた指を開く
			生命維持感覚	生命維持感覚	生命維持感覚	生命維持の反応	生命維持の反応	生命維持の反応
Ⅰ	延髄と索	優良 誕生から 0.5ヵ月 1.0ヵ月 可 2.0ヵ月	対光反射	驚愕反射	バビンスキー反射	胴体はそのまま、手足だけをバタバタ動かす	産声と泣き声	把握反射
			反射作用	反射作用	反射作用	反射に基づく反応	反射に基づく反応	反射に基づく反応

2) 幼児期

幼児期は神経系の発達が著しいため、神経系の働きを高める動作や動きの基礎づくりをしておくことが望ましいといわれている。神経系に関連するのは脳、脊髄、感覚器などである。脳は幼児期に成人の80%まで完成するとされ、大脳皮質の六つの機能のうち、三つの機能は運動面をつかさどるが、感覚機能とも相互に依存している。その運動機能は歩く・走る・跳ぶ、話す、書くなどの身体能力で、これらの身体能力は感覚能力（視覚的な言語を読むという形で見ると、音声による言語を理解するという形で聴く、触っただけで物体を認識するという形で感じる）を土台としており、そ

「生きる力」とからだの発達

それぞれの機能は異なるが、図1¹⁰⁾のように相互関係を保ち依存し合っている。つまり、運動能力（歩く）、言語能力（話す）、手を使う能力（書く）、視覚能力（読んで目に見えるものを理解する）、聴覚能力（聴いて理解する）、触覚能力（触れた感触で理解する）といった能力を発育・発達段階に則してどのように身につけさせるかが重要な問題となるのである。

また、からだの動きをコントロールするには、神経と筋とが協調的に働くことが必要で、さまざまな動作ができる能力、すなわち、「調整力」を高めることが重要であるといわれる。この調整力を、体育科学センター（財団法人）の調整力専門委員会は「心理的な要素を含んだ動きを規定する physical resources である、体力の一要素（身体資源）である」と定義し、調整力を評価する要素として敏捷性、巧緻性、平衡性をあげている。また、小林寛道は「やや複雑な動作を上手にコントロールしながら敏捷に動作することのできる能力」と捉え、幼児期・児童期における種々の運動機能の発達の関係性について測定を試みている。

それによると、幼児期・児童期は、走跳投の能力が相互に相関関係がみられる場合が多く、走ることが得意な子は、跳んだり、投げたりすることも得意というように全身的な運動機能の発達がみられるようである。

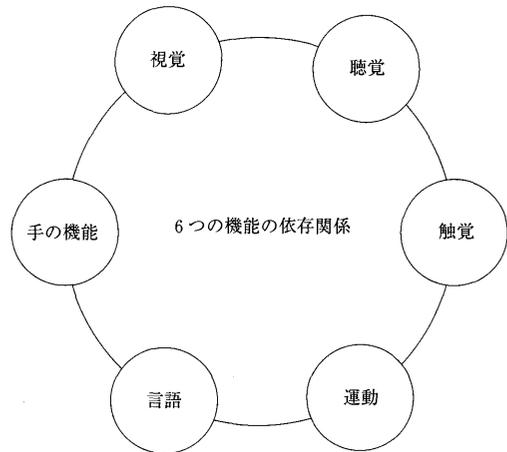
一方、平衡機能や神経機能の発達は、走・跳・投の運動機能の発達とは異なったペースで発達していく。4歳児は筋力（握力、立ち巾跳び、ボール投げなど）が、5歳児は走力の発達がその後の発達の予測の手がかりになるという¹²⁾。

以上のことから、幼児期から学童期にかけて、さまざまな場面で、できるだけ多種目の身体活動をとまなうあそびを経験させ、運動機能のバランスのとれた発達を促すことが望まれる。また、その遊びの質や量の豊富さも重要である。

4. 幼児保育の現場では

幼稚園教育の基本的考えかたは、「遊びを中心とした生活」のなかで一人ひとりに応じた総合的な援助を行うことである。幼児の主体的活動が十分に確保されるよう、保育者が幼児理解に基づき、発達段階にそくして計画的に環境を構成していくことや、保育者の遊びへのかかわりなどその役割

図1



の基本が明記されている。

しかしながら、「早期教育」と称される、特定の能力や技術獲得のための訓練（体育・音楽・語学・書道・その他の知能遊び）が、幼児の発達にとって適切ではないことが認識されているにも関わらず、現場では、「鼓笛で泣くか、サッカーで泣くか」の選択を歓迎する傾向もみられる。

また、一方では、「運動会のかけっこなどは優劣が生じる」との親からの反対を受け入れ、「かけっこ」を中止した幼稚園も出現している。

このような、混乱が生じる根本的な原因は、保育者が相手（親）を納得させるだけの論理を形成していない点に求められよう。子どもの活動内容は、幼児自身の興味や発達課題から出たものでなければ、からだの発達に寄与しない。

藤樫¹³らは「保育者の悩みの実態とその分析」と題して、子どもの自発的な遊びにおける指導・援助の在り方を中心にアンケート調査を試みている。それによると、公立、私立ともに保育者の6割が「遊びの発展のための教材や工夫不足」に悩んでいる。次に「自分自身が遊びを知らない」とする者が約4割強、私立では半数を上回る。同じ割合で「援助の仕方が難しく見守ることが多い」、「友達関係への指導が難しい」、「遊べない子が多くなっている」などの順になっている。

「遊びの発展のための教材や工夫不足」を勤続年数との関係でみると、5年未満（80%）、5～10年（71.2%）、10年以上（60%）、新採（36%）の順である。

「自分自身が遊びを知らない」のは、新採（60%）が最も多く、5年未満（51.1%）、5～10年（46.2%）、10年以上（37%）の順になる。全体に、公立は指導法や幼児理解に関する悩みに対して、私立では園の行事、生活習慣の指導や保育形態など、悩みの傾向に違いがみられる。

ともあれ、「遊びを知らない」保育者が半数にものほり、しかもその数が年々増加傾向にあることを重く見なければならない。このことは、保育者が幼児と遊びを共有体験できないことであり、したがって「遊びの発展のための教材や工夫不足」、「援助の仕方の難しさ」で悩むのは当然である。調査でも約9割の保育者が「子どもの自発的な遊びにおける指導・援助」の仕方に困難を感じており、特に「遊びが発展するためのかかわりかた」、「遊んでいる子どもの興味・関心の捉えかた」、「遊びそのものの活動について」等の具体的手だてに行き詰まっている。

中沢¹⁴は、幼児の遊びを観察・分析し、①場と物・道具類の配置により子どもの遊び展開が大きく違う、②遊び時間も短いと「ごっこ活動」は起こらず、ブランコ、鉄棒、すべり台に群がるだけで終る。③2時間程度時間があると、同じ状態がみられても断続的に続きながら次々と様相を変えて発展していく、などをあげ、「環境」と「時間」の設定が重要なファクターであることを指摘している。そして、遊びの重要性を認識している幼児教育の現場でさえ、「自分が見ている子どもたちの遊びだけが遊びと思い、自分の子どもたちは充分よく遊んでいると思う場合が多い」と結論づけている。

また、岡沢哲子、福田美保子¹⁵は「受容感を高める言葉かけ」に関する介入・指導を施し、運動

「生きる力」とからだの発達

遊び中の保育者の行動を分析している。それによると、保育者の言語活動の適否が幼児の成功感を育む上で有力な一因であることが確認されている。さらに、「励まし、呼名、肯定、矯正、等の意味を含めた言語を共感的に子どもへフィードバックできるようにすること」と具体的な提言がなされている。

その他の研究でも保育者の経験年数に関連した内容、関心、指導方法などの研究があるが、いずれにおいても「保育者が経験年数を積み上げれば、保育上の問題を解決することができるのか」という疑問が共通して垣間見られる。特に、何を「問題」と捉えるのか、保育者が関心を向けている「問題」は共通するのか、などがさらに詳細に検討されねばならない¹⁶⁾。

日本保育学会においても、保育現場の具体的課題を解決するための理論形成に向けた保育実践研究（保育内容、保育の質）の在り方が問われ始めている。その実現のためには、保育実践者と研究者の両者間に介在する共通の動機があり、緊密な連携のもとに研究が推進されなければならないだろう。しかしながら、現実には、両者の間に越えがたい溝があることも否めない。それ以前に、先行研究からも窺えるように、保育者自身が遊び（からだを通して感じたり学ぶもの）を知らないという事実が問題となろう。子どものからだの実態が問われても、保育者のからだが問われることがない。特に、子どもの自発的な活動への援助は、その子の求めるものを素早く読み取り、適当な時期に必要なだけの援助ができる能力が求められる。からだがお互いのコミュニケーションに深く関わる以上、保育者としてのからだの在り方、保育者が幼児と交わるその触れかたが深く追求されるべきである。

保育者も経験に頼るだけでなく、玉越¹⁷⁾の「中堅教師への再教育」にみられるように、現職教員の専門職としての研修（研修内容を選ぶ）を重ねたり、自らを高めようとする自己研修として、読書、観劇、観察・調査の実施、実験・実演の実施、講演会・発表会の聴講、研究協議会・講習会への参加、他の国やよき師への訪問などを積極的に行うことが必要であろう。「生きる力」を求めて主体的に行動することが望まれているのは、むしろ保育者の側であるともいえる。

もっと言えば、問題は現職の保育者に留まらない。我が国の保育実践の改善に向けた火急の課題は、むしろこれからの保育者にならうとする者への教育であろう。角尾¹⁸⁾は「幼稚園教諭養成をしている大学の側でも、現状に厳しい自己評価のメスをいれなければならないのではないか。単位の履修、教育内容、質の高さが免許状に値するかを問題にしなければならない」と苦言している。いよいよ幼稚園教諭（保育士）養成も新たな局面にさしかかっていることを認識しなければならない。

5. まとめ

以上のことから、幼児の「生きる力」を育むためには、実践と研究者が手を携え、今日の幼児をとりまく生活環境を把握し、運動遊びの内容・方法・援助の仕方、環境設定（遊具・用具の選定と

配置), 保育の質や在り方などについて, 理論構築していくことが望まれる。その際, 山市¹⁹の次のようなコメントが大きな示唆を与えている。彼は幼稚園園長の立場から保育実践を眼のあたりにし, 以前の自己の幼児教育の認識と現実との間でかなりのギャップがあったと述べている。それは, 保育形態や外観的レベルでなく, その形態を支える現行の幼児観, 保育観であったという。このことは, 現在の幼児教育界を代表する根本問題と考えられないだろうか。その実態を体で感じるためにも, 幼稚園・保育園の養成機関の教員が, 保育現場で自分の専門領域を実践する機会をもつべきであろう。そこで, 現在の幼児の様子をからだで感じる事が何より大きな教えとなる。

また, 一方で, 遊びを知らない保育者(士) 希望の学生をどのように導くのか。あるいは, 保育観, 幼児観について学生達を指導する教員の側にコンセンサスが形成されているのかどうか, 等々。保育を巡る問題は山積している。

現在, 就学前の幼児を対象とした体育を一般的に幼児体育と呼んでいる。しかし, 幼稚園・保育園等の幼児教育機能をもつ機関においては, 「幼児体育」という実態はあっても制度的には「体育」と称する保育実践は存在しない。むしろ, この分野が現行の5領域全体に関わる性格をもっていることに鑑み, 「幼児体育」を限定的に捉えるのではなく, 「幼児教育」と広く捉えたい。そして, このような認識のもと, 教員(保育士) 養成機関において身につけさせるべき資質について探究することを今後の課題としたい。

注

- (1) 井上弘(1982)「[基本][基礎]をめぐって」体育科教育3月, p.2
- (2) 厚生白書(1998)「刑法犯少年の補導人員および人口比の推移」厚生省, p.27
- (3) 正木健雄(1983)「いま, 子どものからだにみられること」体育科教育6月号, pp.13~15
- (4) 平尾美生子(1983)「いま, 子どものこころにみられること」体育科教育6月号, pp.16~18
- (5) 文部時報(1998)「心の教育の充実を目指して」文部時報9 No.1464, pp.16~27
- (6) 幼児健康度調査(1980, 1991)「乳幼児の就寝時刻の変化」厚生省, 日本児童手当協会, 日本小児保健協会
- (7) 正木健雄(1996)「学齡期シンドロウムとは何か」子ども学 vol.13, pp.66~77
- (8) 太田恵美子(1996)「動かない生活が子どもの体を変えている」子ども学 vol.13, pp.74~79
- (9) シンガー・R・N(1970)「運動学習の心理学」大修館
- (10) グレン・ドーマン, ダグラス・ドーマン, ブルース・ハイギー(1993)「6つの機能の依存関係」「成長プロフィール」赤ちゃんは運動の天才, サイマル出版
- (11) 梅津迪子(1995)「幼児の運動遊びの発達と健康」幼児の運動遊びの新しい進め方, 学術図書出版, pp.7~11
- (12) 小林寛通(1988)「子どもの運動能力と発達」発達 No.34, Vol.9, ミネルヴァ書房
- (13) 藤樫道也, 岩崎姥子, 関口準(1998)「保育者の悩みの実態とその分析」保育学会第51回大会号, p.176~179
- (14) 中沢和子(1988)「子どもにとっての遊び」教育と医学10, p.19
- (15) 岡沢哲子, 福田美穂子(1996)「幼児の運動遊び場面での有能感の形成におよぼす保育者の言語活動の影響」日本体育学会第47回, p.593

「生きる力」とからだの発達

- (16) 岩立志津夫, 諏訪きぬ, 土方弘子, 金田利子, 木下孝司, 斎藤政子 (1997) 「保育者の評価に基づく保育の質尺度」保育学研究, p. 53
- (17) 玉越三朗 (1987) 「中堅教師への再教育」児童心理12, p. 71~77
- (18) 角尾稔 (1997) 「保育者養成の現状と問題—わが国における保育の課題と展望—」日本保育学会50周年記念出版, p. 265
- (19) 山市孟 (1997) 「幼児体育研究に関する予備的考察」埼玉大学紀要教育学部第1号教育科学Ⅲ第46巻, p. 21
- (20) 木村清人 (1998) 「教育課程審議会答申の概要その1」体育科教育10月, p. 76
- (21) 竹内敏晴 (1982) 「からだが語ることば」教師のための身振りことば学, 評論社教育選書16
- (22) 斎藤孝 (1997) 「教師=身体という技術」世織書房
- (23) 季刊保育の実践と研究 (1998) 10 vol. 3, スペース新社保育研究室
- (24) クルト・マイネル, 金子明友訳 (1981) 「マイネルスポーツ運動学」大修館書店